



- 1 田川市弓道連盟のみなさんから指導を受け、真剣に射を狙う団員
- 2 抹茶を楽しみながら大学生とディスカッション
- 3 中元寺川でカヌー体験。競争したり水をかけたりと大はしゃぎ
- 4 福岡県立大学の学生を交えて市民プールで涼しいひととき
- 5 2本煙突の前でパチリ（後列左からヨナタン、エリック、ユリアン、クララ、ハンナ、前列左からスヴェンヤ、エファ、ラーラ、アリーザ）
- 7 8 子どもたちと一緒に汗を流して絆を深めました
- 9 感動のお別れ式。流した涙は心が通じ合っていた証です

※チェスユージェント (Schach jugend)  
チェスは推理力、計算能力など「頭脳を使うスポーツ」として国際的に認められており、1999年の国際オリンピック委員会 (IOC) 理事会で、世界のメジャースポーツ30種の中に加えられています。ユージェントは少年団のことで、チェスユージェントは「スポーツ少年団のチェス部門」を意味します。

言葉は、難しかった。  
でも、心は通じ合っていた。  
田川で過ごした  
最高の夏を、  
私たちは忘れない。

Photo report  
**日独スポーツ少年団  
同時交流ドイツ派遣団来訪**

「いつかまた会える」と信じて  
最終日のお別れ式では、団員たちは5日間を過ごした関係者やホストファミリーと涙を浮かべながら抱き合い、再会を誓いました。団員たちは「田川は本当に素敵なところ。最高の思い出をありがとう」「また会える」と信じています。ぜひドイツにも来てください」とメッセージを送り、涙と笑顔で田川の地を後にしました。

立大学の学生と若者目線でディスカッションをしました。テーマは、障害者などが積極的に参加できる社会を意味する「共生社会」。2020年を契機にハード・ソフト両面でバリアフリーを実践し、障害者が暮らしやすいまちを目指す本市が、本年5月に「共生社会ホストタウン」として国に登録されたことがテーマの背景です。  
意見を交わす中で、団員が発した「多文化社会のドイツでは共生社会は当たり前」の存在で、生活の中で学ばふもの」という言葉に大学生は大きく頷いていました。また、2020年に向けた課題として「交通機関のバリアフリー化」が共通の意見として挙げられました。公共社会学科1年生の大坪胡桃さんは「ドイツの人たちは自分の意見をはっきり述べていて、すごいと感じた。「共生社会」の認識の違いも実感できた」と手ごたえを語りました。

立大学の学生と若者目線でディスカッションをしました。テーマは、障害者などが積極的に参加できる社会を意味する「共生社会」。2020年を契機にハード・ソフト両面でバリアフリーを実践し、障害者が暮らしやすいまちを目指す本市が、本年5月に「共生社会ホストタウン」として国に登録されたことがテーマの背景です。  
意見を交わす中で、団員が発した「多文化社会のドイツでは共生社会は当たり前」の存在で、生活の中で学ばふもの」という言葉に大学生は大きく頷いていました。また、2020年に向けた課題として「交通機関のバリアフリー化」が共通の意見として挙げられました。公共社会学科1年生の大坪胡桃さんは「ドイツの人たちは自分の意見をはっきり述べていて、すごいと感じた。「共生社会」の認識の違いも実感できた」と手ごたえを語りました。

「Guten Tag (こんにちは)」。元気なあいさつとともに、本市を訪れた9人の若者は「第45回日独スポーツ少年団同時交流」に参加したドイツのチェスユージェント(※)の団員。これは、両国のスポーツ少年団が互いに相手国にホームステイし、スポーツ・文化交流などを通して国際経験豊かな指導者を育てる取り組みで、昭和49年から続いています。  
本市の受け入れは、平成24年度と平成28年度に続き3度目。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のキャンパ誘致を目指す本市の取り組みが、今回の受け入れにつながりました。  
NPO法人田川市体育協会と協力し、7月30日～8月3日、多彩な体験事業を実施。弓道やカヌーなどの体験、市石炭・歴史博物館や道の駅おとう桜街道、添田町めんべい工場の見学など、田川地域の魅力が詰まったプログラムでもてなしました。西田川少年サッカークラブとの交流では、フリスビーやドッジボールを楽しみました。キャプテンの中島修人くんは「言葉はわからなくても、一緒にプレーできて楽しかった」とこころ。

「Guten Tag (こんにちは)」。元気なあいさつとともに、本市を訪れた9人の若者は「第45回日独スポーツ少年団同時交流」に参加したドイツのチェスユージェント(※)の団員。これは、両国のスポーツ少年団が互いに相手国にホームステイし、スポーツ・文化交流などを通して国際経験豊かな指導者を育てる取り組みで、昭和49年から続いています。  
本市の受け入れは、平成24年度と平成28年度に続き3度目。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のキャンパ誘致を目指す本市の取り組みが、今回の受け入れにつながりました。  
NPO法人田川市体育協会と協力し、7月30日～8月3日、多彩な体験事業を実施。弓道やカヌーなどの体験、市石炭・歴史博物館や道の駅おとう桜街道、添田町めんべい工場の見学など、田川地域の魅力が詰まったプログラムでもてなしました。西田川少年サッカークラブとの交流では、フリスビーやドッジボールを楽しみました。キャプテンの中島修人くんは「言葉はわからなくても、一緒にプレーできて楽しかった」とこころ。

今回は、初の試みとして福岡県